

新刊紹介

ロメオ・ダレール著（金田耕一訳）

『なぜ、世界はルワンダを救えなかったのかーPKO司令官の手記』

（風行社、2012年）

大庭 弘継

ここで紹介する本書が、決して心温まるものではないことをあらかじめ断っておきたい。むしろ、圧倒的な衝撃ゆえに思考停止に陥る怖れのある本であることを強調したい。本書は、1994年のルワンダ・ジェノサイドに対処したカナダ軍人、ロメオ・ダレールの手記である。なぜカナダの軍人がルワンダにいたのか。ジェノサイド当時、国連PKOがルワンダにおり、ダレールがその司令官だったからである。しかし国際社会はジェノサイド発生とともにルワンダから大部分の兵力を撤退させた。そしてダレールと約400名の部隊がルワンダに残り、ジェノサイドに対処することとなった。

本書は、そのダレールの手記、原題『悪魔との握手』の翻訳である。その内容は、ジェノサイドの残虐さと、残された少数の兵力で対応する苦悩と、人間の無力さが伝わってくる。そもそも評者は原著に衝撃を受けていたのだが、今回の日本語への翻訳はその質の高さゆえに、衝撃度がましていることを告白しよう。正直、今回の紹介のために翻訳書を通読するのでさえ、あまりの衝撃ゆえに歯を食いしばって読み進めたことを告白したい。内容の衝撃度は、本書を手にとって読者自身でご確認いただきたいが、あえて一部を、「UNAMIRが目撃したジェノサイドの最初の光景」を長文となるが引用しよう。

……バジクは二人のポーランド人軍事監視員を発見した。彼らは嘆きとショックで、何が起こったのかを話すことがほとんどできないほどだった。

……彼らが言うには、RGFがその地域に非常線を張り、それから、憲兵隊が一軒一軒IDカードをチェックして回った。ツチ族の男、女、子供たちがすべて駆り集められ、教

会に移された。……

彼らの悲鳴で司祭たちと軍事監視員が気づき、走ってやって来た。司祭と上官は教会の入り口で拘束され、ライフルの銃身を喉元に突きつけられて壁に叩き付けられた……

整然と、そして虚勢の笑い声をあげながら、民兵はベンチからベンチへと移動し、マチェーテで切り刻んだ。即死した者もいたが、酷い傷を負いながら、自分と子供の命乞いをした者もいた。誰も見逃してはもらえなかった。妊娠した女性は腹を切り裂かれ、胎児をえぐり出された。女性は恐ろしいほど切り刻まれた。男たちは頭を割られ、即死するか長くもがき苦しんだ。子供たちは命乞いをしたが、両親たちと同じ扱いを受けた。好んで性器を切りつけ、犠牲者は放置されて出血多量で死んだ。慈悲も、躊躇も、哀れみもなかった。喉元に銃を突きつけられた司祭と軍事監視員は、眼から涙がこぼれ、死んでゆく者たちの叫びが耳に焼きつき、憲兵隊員に犠牲者を救うよう懇願した。憲兵隊員の答えは、ライフルの銃身で司祭と軍事監視員の頭を持ち上げ、もっとよくその恐ろしい光景が見られるようにすることだった。

衝撃的だが、あえて本書の衝撃から一步離れたところで、この事例を考えていただきたい。国際社会は、介入と不介入を繰り返してきたのである。衝撃が世界を揺り動かし、別の衝撃が撤退と不介入を促してきたのである。単に、本書の内容に衝撃を受けて、感情的に介入論に肩入れするのであれば、おそらくその人道的介入は失敗する。

本書が与える衝撃を、ぐっと体内で抑えつつ、一步を踏み出す前に最後の一步にまで思いをいたす必要がある。「苦しみはそれを見たものに責任を与える」かもしれないが、感情的介入論で平和は実現しない。

本書は良書であり、多くの人に読んでいただきたい。だからこそ、評者はあえて感情的介入論の落とし穴を注意喚起したい。評者自身が感情的介入論に陥る瀬戸際にいることを自覚しつつも。

キャス・サンステイーン著 (田沢恭子訳・斎藤誠解説)

『最悪のシナリオ—巨大リスクにどこまで備えるのか』

(みすず書房、2012年)

鈴木 真

本書は Cass R. Sunstein, *Worst-Case Scenarios* (Harvard University Press, 2007) の邦訳である。壊滅的な損害を引き起こしうるリスク因子に対してどのように考え対処すべきか、という問題を扱い、その一般的枠組みの導入を目指している。特に、重大で不可逆的な被害の恐れある場合には、科学的証拠が十分にはなくても、予防的措置を講じるべきだ、という予防原則と、費用便益分析の兼ね合いを検討している。M9の東日本大震災、それに引き続く津波、そして福島第一原発事故と、それに対する備えのなさや対処の難しさを見た後では、こうした理論的問題も身近に感じられよう。サンステイーンは基本的には科学的知見に基づく費用便益分析を重視するが、金銭的価値というより効用(幸福・不幸)を基本的価値としてとらえ、しかも純粋な功利主義とは違い公正の分配の重要性も重視する。彼はこうした費用便益分析によって支持される限りで予防原則(より厳密には、その一解釈)を正当化する。

この種の帰結主義的な考え方を嫌忌する人々も多いだろうが、そうした方々にも本書を読んでみることをお勧めする。サンステイーンの見方は綿密な議論により支えられており、費用便益分析に対する批判にも答えようとしている。彼の立場を最終的に退けるとしたところで、彼の議論から学ぶことは多く、またその主張を反駁することが生易しいことではないことがわかるだろう。

Nudge: Improving Decisions about Health, Wealth, and Happiness (Yale University Press, 2008: 邦訳『実践行動経済学—健康、富、幸福への聡明な選択』(遠藤真美訳、日経BP社、2009))を Richard H. Thaler と共に著しているサンステイーンらしく、本書でも人間のリスク認知にバイアスがあることを指摘しつつ、その前提の下で政策の適正さの問題が検討されている。テロの問題から環境問題ま

で、その射程は広く、不可逆性や人命の金銭価値化や世代間の公正と時間割引の問題など関連する理論的論点にも重要な貢献をしている。もちろん、サンステイーンの帰結主義的枠組に対立する義務論的立場からの批判と予防原則のより広範な適用の擁護の余地はあるだろう。また帰結主義陣営の内でも、例えば彼が奉じているように見える効用のリスク中立性(期待効用が等しい帰結は、等しい価値を持つ)に対する批判はありうる(たとえば、John Broome, *Weighing Goods—Equality, Uncertainty and Time*—(Oxford University Press, 1991))。私としては、日本のリスクに関わる分野の研究者と、政策関係者の多くに本書が読まれ、サンステイーンの見解とその批判が多方面から検討されることを願う。